

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2894400130		
法人名	社会福祉法人 あまのほ		
事業所名	グループホーム 楽々むら		
所在地	兵庫県豊岡市城崎町楽々浦419-6		
自己評価作成日	平成29年4月10日	評価結果市町村受理日	平成29年5月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉市民ネット・川西		
所在地	兵庫県川西市中央町8-8-104		
訪問調査日	平成29年4月28日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・職員は一人一人を把握し最期まで安全に安心した生活が送れるように支援している 積極的に看取りもやっている ・看護師・医師との連携がとれており、また近隣にドクターヘリの離着地があり緊急時の対応も迅速にできる ・理念である“にこにこいきいきゆったり”を念頭に“ここで良かった”と思える暮らしを目指している ・ボランティアやいきいきサロンな、小学生との交流など地域交流に力を入れている ・職員への教育、研修等充実しており、各々のスキルアップが図れている ・敷地内に法人の他事業者があり、大きな行事を一緒に行ったり情報交換や協力体制が万全である ・自然に恵まれた環境にあり四季を感じ、心ませることが出来る 散歩にも最適である ・常に家族との連携をとり「共に支え合う」ことを意識している

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>固定公園内に位置する事業所は、風光明媚な自然環境に恵まれ、周囲15世帯の集落の中で地域と密着した運営がなされている。交流館においてイベントや、カフェの開催などを含め、多くのボランティアを活用し、地域とは風通しの良い関係性が構築されている。開設7年目を迎え利用者の高齢化・重度化が顕著となってきているが、職員は理念を念頭に置き、利用者によりそうケアを目指している。家族へ生活の様子を伝えるために、毎月、日々のケア記録とスナップ写真を送付する試みは、好評であり、丁寧に書かれた記録は職員間で情報の共有化に繋がっている。前年度は「支え合い」を目標に職員間の協力体制を強化し、質の高いケアの提供を目指した。人材不足の中での人材育成は容易ではないだろうが、キャリアパスの導入も考慮中であり、利用者とともに職員もいきいきと輝き続けることを期待したい。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および第三者評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	各職員の名札の裏には理念を書いたカードを入れ常に共有、意識して実践に繋げている。会議や委員会、研修等皆が集まる場所では復唱する機会を設け、また困った時や迷った時は必ず理念に戻るよう導いている。	理念に基づき組織及び個人目標を設定し、振り返りを行なっている。今年度は「利用者ファースト」のスローガンを掲げ、ていねいなケアを行うことを目標にしている。職員の移動や人材不足で理念の中の、「ゆったりと」の部分が十分にできていないことが反省点であり、今後の課題であると考えている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域のボランティア活動には職員・ご利用者が参加し交流している。また地域の方のボランティアによる催しも随時取り入れ交流を大切にしている。地区のいきいきサロンにも参加、また老人大学の方との交流も行い、今年度は畑作り、花作りなど一緒に行っている。施設を理解していただいたり交流の機会の場をひろげ馴染みの関係が構築されつつある。	地域とは相互に協力関係があり、敷地内の交流館は、地域住民にも開放され、会議やイベントに活用されている。法人主催の秋祭りは多くの住民の参加があり、利用者と共に楽しんでいる。また多様なボランティアを活用し、子ども達との交流の機会も多い。職員は地域の清掃活動に参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	施設としては活動を行っていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では日々の取り組みを報告し評価、助言をして頂いている。内容については、ユニットに報告をし、改善や新たな取り組みに繋げている。	地域包括、区長、民生委員、利用者代表の参加がある。家族の参加は得られていない。主に報告や情報交換を行っており、最近では水害時の協力体制が地域との共通の課題となっている。会議の内容がマンネリ化しており活性化の必要性を感じている。	全家族に会議の案内や議事録を送付し、会議への関心や、参加が促進されるよう働きかけてはどうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議では、地域包括支援センター職員・民生委員・区長に参加を依頼し、実情を報告、評価や助言を頂いている。特に区長に関しては、区民と施設との橋渡し役として、あらゆる場面で交流を行い、常に良い関係が築けている。また豊岡市の開催する地域密着型サービス事業者連絡協議会にも参加し意見交換など行っている。	市から研修や最新情報の案内は受けているが、通常は法人が窓口となり、やりとりすることが多い。地域包括とは運営推進会議や、いきいきサロンで会うことが多く協力関係がある。今年度、管理者は地域密着型サービス事業者連絡協議会の会長を務めるため、市との関係性を深める好機であると考えている。	

自己	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事故防止委員会による身体拘束への意識の発信、研修を行っている。施設の施錠については、未だ検討中のままである。	定期的に研修会を開催し、身体拘束しない方針である。しかし、やむを得ない場合は、家族の了解を得て身体拘束マニュアルに沿って行うこともある。現在、センサーマット使用が1名いるが、定期的に評価し、外すための検討をしている。玄関の施錠は同建物内にあるケアハウスとの兼ね合いもあり検討中である。	ケアハウスと調整し、短時間でも解錠する時間が持てないだろうか。
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	モラル委員会により虐待防止の発信、研修を行っている。尊厳を守る事を念頭にケアの方法を見出す努力をしている	モラル委員会で、年に2回研修を行い、不適切なケアや尊厳について学んでいる。多忙時はゆったりした対応が出来なかったり、待つなどの声かけもあるため注意喚起している。毎年、外部機関のストレスチェックを全職員に実施し、結果をそれぞれの職員にフィードバックする仕組みがある。	
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ご利用者の中にも制度を利用している方があり、身近に感じられるようになった。資料をユニットに置きいつでも見れるようにしている。なんとなくは理解できているが活用には至っていない	いきいきサロンで研修を行ったことがあるが、事業所として研修は実施していない。成年後見制度の利用者があり、職員は最少限の理解はあるが、さらに知識を深める必要性を感じている。	権利擁護や制度の理解のために、研修を実施することを期待したい。
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	面接の時点で施設の考え方や、方針等をしっかりと話している。また契約時には、しっかりと時間を取って説明を行い、また質問をしやすい雰囲気を作っている	重要事項説明書と共に利用のしおりも活用し、分かりやすく説明している。特に理念や、利用料金、医療体制、看取りの指針の説明に加え、急変時の対応として事前確認も行っている。契約前に可能な限り見学することを勧めている。	
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的に家族会の場を設けたり、アンケートなどを実施し、家族・利用者の要望の把握、それに対するユニットでの話し合いの場を設けている。また、ケアプラン送付時には返信用封筒と一緒に、意見・要望用紙を添付している。面会時にはできるだけ話しやすい雰囲気をつくったり、何か問題や心配をかかえておられそうな家族には積極的に話しかけるようにしている	家族会の開催や、忘年会への招待、毎月利用者の日々の様子を詳細に写真とともに伝えるなど、コミュニケーションや信頼関係が深まるよう努めている。また毎年アンケートを実施し、積極的に要望を知る試みも行なっている。面会人について知りたい、体重を教えてなどの意見を反映した。	
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニット会議には管理者も出席し、現場の職員の声に耳を傾けている。その場で解決できる事は解決し、組織全体で話し合うべき内容は、必ず代表者に相談をしたり会議に持ち寄るようにしている。またアンケートや個人面談も実施している。	ミニカンファレンスや定例会議、各委員会などで職員は提案や意見を発言できる。また目標を持ち研鑽して行くことを奨励されており、管理者は定期的な面談を行なっている。提案は浴室の手すり増設や行事の企画など反映されている。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12			○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格取得に向けてのフォローアップや研修への参加など、向上心がもてるような環境を整えている。外部研修、施設内研修の費用、超過勤務手当などもしっかりとしており、学ぶことへの意欲が高められるようフォローアップしている		
13			○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人職員に関しては、OJTの仕組みを確立している。また日々の中での各々が成長できるようにリーダーを中心にその都度声掛けや、意見交換を行っている。内部、外部の研修も計画的に行っている。		
14			○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス事業者連絡協議会に参加し意見交換を行っている。各事業所の事例発表を行っており、他施設の様子を知る事が出来、勉強する機会となっている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15			○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	面接時には本人が安心できるような声掛けを行い、思いを話しやすい環境作り心掛けていく。本人の思いを把握し情報をフェイスシートに起こして皆で共有している。		
16			○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面接やその前の電話連絡で、十分に困りごとに耳を傾けている。話しやすい雰囲気を作り信頼できる関係作りに努めている。		
17			○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面接時には、しっかりと聞き取りを行い、何に困っているのかの把握を行い、そのうえで入所を決定している。面接時の聞き取りを基にケアプランを作成し必要なサービスを行っている		
18			○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	基本情報や関わりの中で得意な事、苦手な事、好きな事、嫌いな事を把握している。1日を過ごす中で料理、裁縫、家事、レクリエーションを通して興味を引く事を探している		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19			○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	困りごとや、提案等はその都度、家族に相談をしている。本人にとって何が一番良い事なのかを家族と一緒に考えて答えを見出している		
20	(11)		○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	特養、デイサービスがある中で馴染みの人や、昔からの知り合いに会う事が出来る。しっかりと職員が把握を行い、一緒に会いに行くようにしている。	家族や友人の訪問、法人内の事業所の友人を訪ねるなど、関係性継続を支援している。家族との外出を勧め、地域のふれあい喫茶などの新たな馴染作りも試みるが、利用者にとって事業所が落ち着く場所となっている。	
21			○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入所時は職員が中に入り紹介等を行っている。利用者同士のおしゃべりの中でコミュニケーションがとりにくい場合は間に入り、橋渡しを行っている。家事等も一緒に行い“教えて頂く”という事を大切にしている		
22			○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホーム退所時にはも利用者の情報を移された先に提供。またその都度相談ができるように働きかけている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(12)		○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入所時の面談では、本人の意向、望む暮らしの聞き取りを行っている。不安や思いを受け止め傾聴している。また言葉として発せられない気持ちを表情などから汲み取る努力をしている。家族からの聞き取りも大切にしている	利用者の情報を丁寧にとり、利用者独自のサインなどはカルテに記載し、職員間で共有している。利用者の「家に帰る」という訴えは臥床すると落ち着くため、「疲れた横になりたい」との同意語だと理解できた事例もあり、行動をアセスメントし、働きかける工夫も行なっている。	
24			○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時には、生活歴の記載提出をお願いしている。そのシートや本人、家族の聞き取りからできるだけ早く本人の生活歴や入所への経緯を知るように努力している		
25			○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	出来る能力に対しての見極めと、負担にならない役割りの提供を行っている。生活の質を上げていくために、思いを尊重し個別の対応を心掛けている。情報をチームで共有している		

自己	者第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	現場での情報をつかみ、気づき、関わりの工夫を重ねて、本人がよりよく生きるためのケアの集積を行っている。家族のニーズや体調の変化、情報の共有と検討を重ねている。	モニタリングは担当者が毎月実施し、ケアマネがミニカンファレンスや、ケア記録などから総合的に判断し、ケアプランを立案している。担当者会議にはケアマネや、看護師、相談員などで開催しているが、家族が参加することはほとんどない。	利用者・家族を含めた担当者会議の開催を期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の生活を個別に本人の言葉で記録している。担当意識をしっかりと持ち、常に個人のより良い生活の為の工夫を行っている。プラン変更時のカンファレンスには『これだけは絶対にやりたい』『そのためにどうしていきたいか』を熱い思いを持って臨み介護計画に生かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	生活を豊かにし、楽しい日々を送っていたが、為多様な支援の取り組みに柔軟に取り組んでいる。たったひとりのニーズであってもサービスとして組入れる必要があれば検討を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在近隣の協力をえて“いきいきサロン”等に取り組んでいる。少数人数ではあるが少しずつ参加し外との社会的な繋がりを保っている。近隣の方にも施設イベント等にボランティアとして協力してもらう取り組みを行っている。		
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	嘱託医を中心とし、精神科・歯科等の専門医への往診、相談体制を整えている。その他の医療機関への受診も家族、本人の理解、協力をえながら行っている	利用者、家族納得のうえで、法人嘱託医の往診を利用している。他科受診時は、基本家族の付き添いとしているが、職員が支援、若しくは同行したり、往診医の利用もある。利用者の状態変化や服薬変更等があった場合は、随時家族に報告し、共有に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の状態の変化はその都度看護師に報告し、記録にも残して情報を共有している。早い段階での状態変化や異常を察知し看護職、かかりつけ医に相談する体制を整えている		

自己	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には利用者に関する情報を病院に提供している。また退院時には家族、医師等と話し合いの場を持ち本人、家族の不安や心配の軽減に努めている	日頃の体調管理を心がけ、些細な状態変化にも速やかに対応し、入院回避を図っている。入院した場合においても認知症状への配慮から、できるだけ早期退院に努め、利用者、家族が安心できる環境を大事にしている。医療関係者とは、常に利用者の状態確認、対応の意思統一を図っている。	
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	体調変化時には、医師より家族に対し、状態の説明や今後の意向の確認を行う。その結果を踏まえグループホームでできる事の説明や家族の思いの聞き取りを行う。その後看護師、介護士、ケアマネ等での終末期に向けてのカンファレンスを行い臨んでいる	今年度、看取りの事例があった。入居時より、利用者、家族の意向を優先し、思いの共有に努めた。看取り後は、職員間で利用者を偲ぶと共に振り返りを行い、個々の反省を共有することで、職員の意識向上につながった。今後もチームとして、利用者、家族に寄り添った支援をしていきたいと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年に1度、消防署に協力して頂き救命救急の講習を職員全員が受けている。施設でもマニュアルを作成し急変や事故発生時に備えている		
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を行っている。施設で作成したマニュアル等で災害時にどの様に職員が行動するかを把握している。また運営推進会議などを通して災害時の地域の方の協力の依頼を行っている。	毎年2回の法人合同による避難訓練を実施している。4月は消防署立ち合いで、7月は夜間想定で、利用者も一緒に、避難経路の確認を行った。少しずつではあるが、マニュアルに沿いスムーズな動きができるようになってきた。運営推進会議では水害を含む防災全般について、協議している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	全室個室であるため自分の時間を持ちたいときには部屋に入る事ができ、プライバシーを確保できている。しかし、共通のトイレや入浴となると職員が出入りするので守り通せていない部分もある。言葉かけにも気を付けている。	主に職員は、モラル委員会で寸劇を通して、普段おこりうる身近なちょっとしたことを取り上げ、適切なケアへの意識向上に努めている。居室ドアの出入りの際の声かけ、利用者への呼びかけ等、注意を促している。利用者の一人で過ごす時間についても、配慮を心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	お粥の日であってもパン固定、希望に応じてバナナなどの果物をつけて対応している。飲み物・パンにつけるジャムについては選択肢がないので、選択できるものを準備していきたい。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38			○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日どうしたいか希望される方はいない。時々日光浴や散歩の希望があり、その時は対応できている。行事がある時にはその事を先に伝え、その行事に向けて動けるように気配りをしている。		
39			○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	愛用の化粧品を使用している方もある。着替えの時には一緒に選んで好みのものを着て頂くようにしている。いつもと違うおしゃれにはいち早く気づいて声をかけ意識を高めてもらえるようにしている。月に一度の施設での散髪も自分で施行の決定を行って頂いている。着替えを拒む方への支援に悪戦苦闘している。		
40	(19)		○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	いつも食べ物のお話で盛り上がっている。食事前後のテーブル拭きや食器洗いを自分の仕事として率先してして下さる方もある。	併設施設の厨房で調理され、盛り付けられた物が届く。ご飯やみそ汁等は事業所で調理し、出来立てを食べる。普段、職員は介助に徹し、一緒に食べないが、ユニットキッチンで、おやつを手作りする時は、職員も共に楽しむ。管理栄養士によるメニュー、個々の特性に応じた調理法を工夫するなど、個別ケア委員会で検討し、利用者からの意向も参考にしている。	
41			○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事以外にも10時15時に水分補給をしている。水分摂取量が少ない時にはアプローチはするが結果に結びつかないこともある。食事が入りにくい方には食事形態の見直しを行ったり、PTに助言をいただき、食事の姿勢を工夫したりしている。栄養士によりカロリー計算も行いアドバイスを受けている。 □		
42			○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科衛生士、歯科医に定期的に歯磨きのポイントを教えていただき、同時に困っていることへのアドバイスをいただいている。また研修で理解を深めている。超音波 義歯洗浄器を使い、2週に1度義歯の機械洗浄を行っている。		

自己	者第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日々の様子から排泄状態を把握し、様子を伺いながら排泄の案内を行っている。都度体調なども考慮しながら排泄用品の検討を行っている。	布パンツの人もいるが、多数はリハビリパンツにパットを使用している。利用者個々の排泄パターンから、職員は早めに声かけしたり、個々に応じてさりげなくトイレに誘導している。トイレに座る習慣を取り戻すことで、より自立につながっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックは毎日行っており、無排便3、4日になると水分を勧めている。薬に頼ることが多いが、下剤の指示が出て看護士と相談の上見送ることもある。ラジオ体操などの体操を勧めている。 <input type="checkbox"/>		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	施設内の行事や催しがある場合、午前中に勧める傾向がある。曜日は決めているが、無理に入浴を勧めることはしていない。一人で入浴できる利用者には過度な支援を行わないよう心掛けている。 <input type="checkbox"/>	利用者のこれまでの習慣や好みを考慮した大まかな予定はあるが、その日の状態や声かけ後の利用者の意向を優先している。毎日の入浴を習慣にしている人、自分のペース、こだわりのシャンプーや石鹸類の使用等、個々の楽しみ方を大事にしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自分のペースで部屋に帰り休めている。生活のリズムが狂ってきたら日光浴を勧めたり日中に活動するように心がけている。 <input type="checkbox"/>		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬のファイルを用意している。常に見れるようにユニット内に保管している。 <input type="checkbox"/>		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	張り合いや喜びに溢れている生活ができているとはいえないが週に1回の訪問パン屋を楽しみにしている方もいる。月に1回のお遣いで希望の品物を購入できる。食後の食器洗いを自分の仕事とされている方がいる。手芸や工作、散歩などの気分転換の支援をしている。		
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	いきいきサロンに参加している。毎回こちらで人選をし地域の方と交流している。顔なじみの関係が築け、会話も弾むようになっていく。なかなか外出希望の声が聞かれないので職員の働き掛けで外出支援をする事が殆どである。 <input type="checkbox"/>	定期的な地域サロンでの交流が継続され、深まりつつある。地元で開催されるまつりや行事には、利用者にはできるだけ声をかけ、参加するようにしている。季節のいい時期には公園や近郊にドライブに行くなど、気分転換を図っている。家族と外出や外食を楽しむ人もいる。普段は、事業所前の駐車場の季節の花を散策している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分で金銭管理をしている方は数人ある。また事務所に預かり、いる時に出して使うという方法をとっている方もいる。		

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の理解が得られている場合は電話の希望があれば出来るように配慮している。 <input type="checkbox"/>		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	人間関係等に配慮しつつ、テーブル配置をしている。コルクボードの飾りつけをすることで季節を感じていただけるよう工夫をしている。写真を貼るようになり、皆さんの楽しみになっている。 <input type="checkbox"/>	ユニットを挟んで交流スペースを兼ねたロビーからは、国定公園の景色が眺められ、ほっとできる。リビングに入る和風の引き戸が落ち着いた雰囲気を感じさせる。リビングは、複数のテーブルやソファが、その時々状況に応じ、柔軟に配置され、利用者も思い思いに過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビング内のソファを独りになれるスペースとして活用している。また、共有スペースが独りで過ごせる場所となり、気の合う利用者同士で過ごせる場ともなっている。 <input type="checkbox"/>		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッドやテレビの位置はある程度固定されてしまうが持ち込みの家具等、家族の方が本人を交えて配置している。使い慣れたものや馴染みの品についてはなかなか持ちこめていない現状がある。 <input type="checkbox"/>	備え付けのクローゼット、洗面台が用意されている。ベッドは、これまで使っていた物や馴染みの物を持ってきてもらっている。利用者の習慣や普段の動線を考慮し、安全に過ごせるよう配置に気を付けている。家族の写真やお気に入りの小物、花などが、さりげなく飾られている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内には手すりが付いていて歩くときに使っている。入浴時には個々に応じ簡易手すりを付けたり外して対応している。 <input type="checkbox"/>		